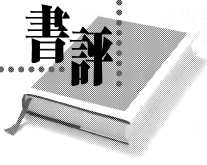


書評



熊野宏昭, 久保木富房 編, 貝谷久宣 編集協力

パニック障害ハンドブック

治療ガイドラインと診療の実際

切池信夫

日常診療に役立つパニック障害の実践的治療法を紹介

「不安障害の時代」「うつ病の時代」といわれて久しい。不安障害の中でもパニック障害は多いものの一つで、患者はパニック発作による身体症状を訴えてはプライマリケア医に受診する。したがって、最初に受診するのは内科や時には救急病院といった精神科・心療内科以外の科である。

そして大部分が正しく診断されるまで、数か所以上の病院を訪れる。この病名が認知されて約 30 年経過するが、一般臨床の場で正しく診断され治療に導入されているかといえば、まだまだ不十分な感がある。プライマリケア医が、最初の受診からの確かな診断と適切な治療に導けば、患者の QOL を高め、不必要な検査を避けて医療費の抑制にもつながる。

パニック障害に関する書物は多く出版されているが、本書は、厚生労働省こころの健康科学事業「パニック障害の治療法の最適化と治療ガイドラインの策定に関する研究班〔班長 久保木富房(平成 16 年度), 熊野宏昭(平成 17-18 年度)]」の研究成果をもとに上梓されたものである。全体は 8 章からなり、1 章「パニック障害の基本」、2 章「パニック障害の治療ガイドライン」、3 章「診断と評価」、4 章「心理教育」、5 章「薬物療法」、6 章「個人認知行動療法: パニック発作に対する内部感覚エクスポージャー」、7 章「個人認知行動療法: 広場恐怖に対するエクスポージャー」、8 章「集団認知

行動療法」、となっている。これらの中で 2 章のパニック障害の治療ガイドラインが、著者たちを中心とする厚生省研究班により、プライマリケア医や、パニック障害を専門としない心療内科医や精神科医に向けて作成されたものである。したがって、パニック障害についての治療経験のある先生方は、この 2 章から読み始めて治療の流れを知り、その中でより詳しく知りたい章、例えば診断と評価、心理教育や薬物療法、認知行動療法などに読み進まれてはと思う。パニック障害に関して経験はないが、今後治療してみたいと考えておられる先生方には、1 章のパニック障害の基本から読み始め、次に 3 章の診断と評価、そして 2 章のパニック障害の治療ガイドラインへと進まれてはどうだろうか。

本書の特徴として治療面に重点が置かれており、4 章の心理教育などは、患者や家族に実施すればすぐに効果が出そうな実践的な内容である。さらに個人・集団認知行動療法が分かりやすく説明されており、認知行動療法についての技術を習得できるのではないかと考える。

このように本書は、パニック障害の実践的な治療法について紹介されており、日常臨床において役立つこと間違いなしと思われる。本書がパニック障害の治療マニュアルとなり、パニック障害の診療に寄与することを期待したい。

(大阪市立大大学院神経精神医学教授)

●B5 168 頁 2008 定価 3,990 円(本体 3,800 円+税) 医学書院